

## 色内通り、堺町通りの商店

堺町通りや色内通りには 19 世紀後半から 20 世紀初頭の商家や倉庫、銀行が数多く保存されておりショッピングや観光の拠点として人気です。1 世紀以上前、小樽の繁栄の頂点にあったときと同じように人力車が観光客をこのエリアに運びます。

### ウォーターフロント

小樽の経済力の台頭はニシン漁から始まりました。ニシンは貴重な肥料に加工され本州南西部の綿花畑や藍畑に使用するため出荷されました。19 世紀末にはニシンの年間漁獲量が 9 万トン近くに上り、「ニシンのゴールドラッシュ」が富と新たな企業の流入をもたらして小樽は急速に発展しました。

小樽には海運に適した深い港がありましたが、山がちな地形のため必要なインフラ整備に適した平地がほとんどありませんでした。拡大する港の需要を満たすため埋め立てで新しい土地が造成されました。1889 年、市の商業中心地となる堺町、色内、北浜、南浜が埋立地の上に造成されました。当時、堺町通りはまさにウォーターフロントでした。

1914 年に小樽運河の工事が始まる前、商人は海へのアクセスを考えて堺町通り沿いに店舗や倉庫を建てました。港の船から商品を運ぶ小舟は倉庫の前に直接停泊することができます。砂糖、綿花、米などの商品を扱う問屋が開業しました。

### 豊かな近代都市

堺町通りは卸売りやショッピングの地区として発展しました。20 世紀初頭の小樽の写真にはスーツを着た銀行員や小売店のスタッフ、着物を着た顧客が、馬車、人力車、そして時折自動車とともに写っています。岩永時計店のベランダでは集客のためのブラスバンドによる演奏が行われ、通りに活気を与えました。

妙見川の北側で堺町通りが色内通りになります。色内通り沿いには銀行や商社が開業し、小樽の銀行街となりました。小樽の銀行の数は、1887 年の 3 行から 1907 年には 16 行へと急速に増加しました。1912 年には日本銀行小樽支店が開設され、小樽は北海道の経済の中心地としての地位を確立しました。

### 困難な時代

20 世紀半ばになると小樽の経済は衰退していきました。北海道東海岸の他の港が東京へのより便利な航路を提供し、国のエネルギー需要の主流が小樽から出荷されていた石炭から石油に切り替わりました。多くの銀行が北海道行政の首都として確立された札幌に移転し、買い物客は鉄道の便が改善されたため札幌の大型デパートを訪れました。かつて堺町通りに押し寄せていた人出は

減り、1960年代には多くの倉庫、店舗、銀行が空き家になりました。

#### 小樽の歴史を守り、街の繁栄を取り戻す

1960年代、地元政府は小樽運河を埋め立てて新たに6車線の道路を建設することを提案しました。この提案が運河を保存するための地域社会の取り組みに繋がり、小樽の歴史的な中心街を活性化するための保存運動の始まりとなりました。1980年代に二者が妥協に達し運河の一部が保存されました。舗装された歩道、街灯、装飾的な橋が設置され、魅力的な散策エリアとして復活しました。広い木村倉庫は、北一硝子が1983年に小売店兼レストランとして改修され、訪問客を呼び込みました。この成功をきっかけに他の企業が堺町通り沿いや小樽運河周辺の倉庫を魅力的な商店街に作り上げました。現在、荒田商会の出荷事務所とかつて小豆を保管していた高橋倉庫は、5つの歴史的建造物を博物館や画廊として公開した小樽芸術村の一部となっています。かつて北海道有数の精米所および穀物商社であった共生株式会社のレンガ造りの2階建ての立派な事務所はオルゴール専門店に改装されました。

1931年に色内通りに貿易商向けのホテルとして建てられた旧越中屋ホテルがアンワインドホテルとして改装オープンし、近くの商工会議所ビルはOMO5ホテルの別館となっています。かつての銀行のいくつかは博物館として一般公開されています。いくつかは小樽芸術村の一部です。かつて空き家だったこれらの建物の歴史的魅力は都市の経済復興に大きな役割を果たしてきました。